

企画展 仏像をなおす  
P1～P3令和3年度新収蔵品紹介 滋賀県社寺建築関係資料  
P4～P5 (大洞藤三郎・田中宗次郎・  
赤塚吉郎旧蔵資料)収蔵品紹介 戦時中に製作された紙芝居  
P6

# 大津 歴博 だより

2022  
No.  
127

大津市歴史博物館

令和4年6月15日発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

## 伝教大師最澄没後1200年記念企画展

# 仏像をなおす

会期：令和4年7月23日(土)～9月4日(日)

### 延暦寺根本中堂の仏像修復と研究が進んでいます。

企画展のタイトル「仏像をなおす」は、破損したり失われたりした仏像について、「もとの良好な状態にもどす」という意味を持っています。つまり修復や復興によって元の姿にもどしてきた大津の仏像の歴史について、その一端を紹介しようとするものです。今回の歴博だよりでは、なおすことが繰り返され、数奇な運命をたどることとなった比叡山延暦寺に伝来する仏像についてお話をしていきたいと思えます。

現在、比叡山延暦寺では開祖である伝教大師最澄が入滅して1200年になることから、様々な記念事業を行っています。本堂である根本中堂の大改修もそのうちのひとつで、大きな屋根の葺き替えなどかなり大掛かりな修復が行われています。そしてこれにあわせて、堂内に安置された仏像についても順次修復が進んでいます。

今回話題にするのは、本尊の秘仏薬師如来立像の周りに安置されている、梵天・帝釈天と十二神将の14 軀についてです【写真1】。このうちの数体は、東京国立博物館を皮切りに3会場で開催された「最澄と天台宗のすべて」展で、根本中堂の内部を再現した写真撮影可能コーナーに展示されていたので、撮影された方もいらっしゃるでしょう。

これら14 軀の像は、2018年度から順番に修復に入っており、現在は10～12 体目の未神、申神、酉神が行われているところです(未完)。

今回その修理で像を解体したところ、像内から墨書銘が発見されました。像は頭体の幹部を一木ではなく、針葉樹(ヒノキ)の木材を、中を割りぬいた(内割)あとに、前後に2材を矧ぎ合わせて造られています。いわゆる寄木造りです。ですから像内にはある程度の空洞ができるのですが、ほとんどの像の内面に様々な墨書銘が書かれていました。



【写真1】十二神将 午神(比叡山延暦寺蔵)



このうち、梵天には、「勸進僧榮賢 中臣乙大女」とあり、また、午神【写真2】には「僧榮賢、同榮賀、同乙大女、正慶壬申元年六月日」とあることから、榮賢や乙大女、榮賀らが勸進を行って、正慶元年（1332）に造立されたことがわかりました。さらに巳神には「午極月」とあり、それは「庚午」の年の12月でしょうから2年前の元徳2年（1330）の12月のことで、数年かけて14軀を造立したさまがうかがわれます。また、巳神には、「仏し頼弁 ひたのほんけう（飛驒法橋?）」、辰神でも「ひ□□□□□（たのほんけ）う頼弁」とあり、頼弁という仏師によって造られたことも判明しました。これらの墨書銘の発見により、今まで寛永11年（1634）の根本中堂の再建時と同じ頃の作では、とぼんやりと思われていた本像が、鎌倉時代の仏師頼弁<sup>らいべん</sup>が造った像であることがわかったのです。

### 聖衆来迎寺の薬師三尊仏と一具と判明しました。

さて、その仏師頼弁や勸進僧榮賢らについての詳細は不明ながら、次の史料に名前が出てくるのが確認できています。それは、聖衆来迎寺所蔵の『来迎寺要書』で、「合衆（カ）檀那／右勸進沙門 榮賢播摩書判アリ／中臣氏女字乙丈女 同／同子豆榮賀式部同／同弥陀女 同／同多聞女 同／同千手女 同／同比丘尼阿弥陀者 榮賀女〇判／ふつしいなはほうけん（仏師因幡法眼）頼弁判／現世安隱為後生善処／元応元己未年八月八日 勸進敬白／右通日光月光脇士ノ腹心書付色紙也」と記されています。実はこれは、聖衆来迎寺所蔵の日光・月光菩薩像（重要文化財）【写真3】について記したもので、寛文元年（1661）頃に「仏工師洛陽六条大仏師民部法眼」がこの像の修理を行い、像内にあった書付の内容を記録しています。ただし、読みにくく、「すぐには見分けがつかないけど推量しながら書いた」とあり、内容の正確さにはやや難があります。これを信じるならば、日光・月光菩薩像は元応元年（1319）に、榮賢らの勸進によって、頼弁が造立したことがわかります。

つまりこれらを見ると、聖衆来迎寺の日光・月光菩薩像と、延暦寺の梵天・帝釈天と十二神将像は、鎌倉時代後期の14世紀前半に、同じ環境下で同じ作者によって制作された可能性が高いと考えられるわけです。

### もともと京都の元応寺の旧像とわかりました。

日光・月光菩薩像は、厨子内に秘仏としてまつられている薬師如来立像の脇侍で、この本尊は京都の岡崎にかつてあった「元応寺」の本尊でした。この元応寺は、鎌倉時代後期に天台宗の戒律復興活動の中心人物であった、黒谷流円頓戒の興円と恵鎮によって創建され、法勝寺とともに京都における天台律院の中心的な寺院でした。しかしながら応仁の乱以降に荒廃したため、16世紀後半に聖衆来迎寺と合併してしまいました。この薬師如来像は、伝教大師最澄自刻という延暦寺根本中堂の本尊を、開山の興円が模刻したという霊像ですが、絵画や聖教類などとともに合併時に移されました。元応寺の旧像として日光・月光菩薩像が聖衆来迎寺に現存しているゆえんです。

ということは、同環境で造られたであろう梵天・帝釈天と十二神将像も、元応寺旧蔵という可能性が出てきます。『来迎寺要書』をさらにみると、15世紀中頃、永享7年（1435）に焼失した延暦寺根本中堂の復興のために、開山以来130年間安置の十二神将像を根本中堂に移すことを延暦寺から打診されて、元応寺は困惑しています。しかしながら、文安4年（1447）にはなかば強引に延暦寺に移されてしまっただけで老若が涙したといい、替わりを造るための費用が延暦寺から渡されたので、早速、十二神将像を新造します。ところがその2代目の像は応仁の乱で焼失してしまい、寛文元年に破損したものを求めて今安置している（3代目）、と記しています（3代目は聖衆来迎寺に現存）。これらの史料によって、元応寺の創建当初の十二神将像は、確かに15世紀中ごろに延暦寺根本中堂に移されたということになります。

さて、周知のとおり、延暦寺の根本中堂は、元龜2年（1571）に織田信長らによる焼き討ちに遭い、焼失してしまいました。ですから、今ここに安置されている十二神将像も寛永の復興像となんとなく思われていました。ですが、今回の解体修理による墨書銘の発見により、それをさかのぼる像であることが明らかとなったため、この焼き討ちを逃れて焼け残った像ということになります。つまり、聖衆来迎寺に残る仏像とともに、もともと元応寺の薬師三尊像の眷属として鎌倉時代に造立された像である可能性が高いことが判明したわけです。なお、日光・月光菩薩像は



元応元年（1319）の造像で、一方の十二神将像は元徳2年（1330）頃から造立されており、両像の造立年には少し開きがあります。元応寺はその名の通り、元応年間（1319～21）に創建となった寺院ですから、本尊である薬師三尊が最初にこの頃に造られ、完成後は次いで四天王が着手されたはずです。さらにほかの堂宇の像もありましたし、お金を集める勧進方式による造像ですから、十二神将像を造るまでにやや時間がかかってしまったのかもしれませんが。

### 幻の寺、元応寺の本堂は、延暦寺根本中堂写し。

この聖衆来迎寺の薬師如来像は根本中堂像の模刻像であり、さらに根本中堂は薬師三尊の周りに四天王と梵天・帝釈天、十二神将が取り囲むという独特の尊像配置となっています。本像の中に梵天・帝釈天が含まれるということは（四天王だけ亡失）、元応寺本堂そのものも根本中堂写し（湖南省の善水寺などが著名）であったことが考えられます。実は、京都に根本中堂を写した堂宇を持つ天台宗寺院の存在は、今のところ知られていません。ですから、このことにより元応寺の特異性がうかがわれ、興円・恵鎮の

寺院構想の一端を垣間見る絶好の資料ということができそうです。また、永享7年（1435）焼失以前に根本中堂に安置されていた十二神将像は、14世紀前半に恵鎮がなおしたものでした。ですから、この根本中堂像が失われた際、同じく恵鎮が造った元応寺像が選ばれたのも、因縁が無い事ではなかったのです。

今回の様子を見ると、室町時代に根本中堂を復興するために元応寺像を移して「なおす」延暦寺僧や、荒廃した元応寺を聖衆来迎寺に「なおす」元応寺流の僧、江戸時代に日光・月光菩薩像を「なおし」て像内の墨書銘を記す仏師、そして伝教大師最澄の1200年の御遠忌に仏像を「なおし」た延暦寺と修理所の皆さんというように、様々な方々が「仏像をなおす」行為をしてきました。このおかげで延暦寺根本中堂がみごとに復興され、さらには跡形もなくなってしまった元応寺に安置されていた仏像が、比叡山の山上と山麓の近くで奇跡的に現存し、元応寺の在りし日の姿を我々が知ることができます。たえまなく「仏像をなおし」てきた人がいたからこそ、我々はその歴史を知ることができるのです。

（学芸員 寺島典人）



【写真2】像内墨書銘（赤外線写真 十二神将像 午神 比叡山延暦寺蔵）



【写真3】参考 重要文化財 月光菩薩立像（聖衆来迎寺蔵）



## 滋賀県社寺建築関係資料(大洞藤三郎・田中宗次郎・赤塚吉郎旧蔵資料)

前号に引き続き、昨年度に当館が新たに収蔵した資料をご紹介します。この資料は、昭和期に活躍した建築技師・大洞藤三郎だいどうとうざぶろう(1905～1983)が保管していたものです。大洞技師は岐阜県出身で、早稲田大学を卒業後、当時の神社建築分野で活躍していた小林福太郎こばやしふくたろう(1882～1938)に師事し、その設計事務所であった小林建築設計事務所こばやしけんちくせいけいじやうで腕を磨きました。資料の中身は主に滋賀県内の社寺建築に関わる図書類で、その内容として近江神宮、滋賀縣護國神社、御上神社みかみなどがあります。滋賀県外のものでは、栃木県にある足利織姫神社あしかがおりひめや、先ごろ社殿が国宝に指定された鹿児島県・霧島神宮の改修計画案とみられる図面などが含まれています。分量の面では近江神宮の図書類が大部分を占め、滋賀縣護國神社がこれに次ぎます。ここでは、主に近江神宮の創建史をなぞりつつ、その図書類について紹介していきます。

近江神宮が創建されたのは今から82年前の昭和15年(1940)のことですが、その原形となる構想自体はそれ以前から存在していました。まず明治28年(1895)に、当時の大津町長が志賀宮(近江大津宮)と天智天皇の顕彰を目的とし、有志を募って「志賀宮趾碑」を、現在の大津市錦織に設置しています。また明治41年(1908)には、大津市政施行10周年の記念事業として、天智天皇を祀る神社を創立する構想が大津市長・西川太治郎にしかわたいじろう(1864～1942)により出されました。このときは大津市内の長等山を境内地とする構想だったようで、翌明治42年(1909)には総理大臣をはじめとする国務大臣に宛てて請願が行われています。この天智天皇奉祀神社創立の請願は、明治42年から大正3年(1914)まで毎年のように提出され、その度に請願委員会による審議と採択が行われていますが、計画自体が大きく進展することはありませんでした。というのもこの時点では境内地を大まかに想定していたものの、実際の土地の買収や造営資金の確保などについては「神社造営敷地ハ勿論造営費ノ幾分ハ寄附可致いたすべく」とした程度で、実際に予算などを確保していたわけではありませんでした。また当時の世相に目を向けると、明治37～38年(1904～5)にかけて日露戦争、大正3～7年(1914～18)

にかけて第一次世界大戦が勃発しており、政府としても神社創建の必要は理解を示しつつも、実際に予算を割く余裕はなかったのが実情だったのではないのでしょうか。

その後も請願は続けられ、当初は大津市の有力者が中心だった運動も、次第に滋賀県全体を巻き込んだ運動へと変わっていきます。事態が大きく動くのは昭和8年(1933)のことで、当時の滋賀県知事であった伊藤武彦いとうたけひこ(1891～1939)が、天智天皇奉祀神社の創立について内務省(戦前に存在した官庁。省内の神社局が神社管繕事業を統括していた)と交渉を行い、また滋賀県議会でも神社奉祀調査費として1500円の予算を可決しました。翌年には神社奉祀調査委員会が組織され、次いで昭和10年(1935)には内務省神社局より考証官の宮地直一みやぢなおかず(1886～1949)と技師の角南隆すなみなかし(1887～1980)が相次いで来県し、鎮座候補地の調査を行っています。そして角南の斡旋により小林福太郎も来県し、社殿の大体設計に取り掛かっています。

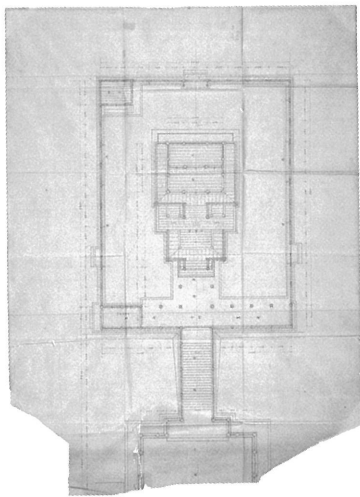
そして昭和12年(1937)、近江神宮の創建と官幣大社に列格されることが正式に決定し、来る紀元二千六百年(昭和15年)の鎮座に向けて動き出すこととなります。またこの時、近江神宮創建のための「近江神宮奉賛会」が正式に組織され、会長には滋賀県知事が就任しました。なお、「近江神宮奉賛会概要」(昭和14年発行)によると、工事は第1期事業(昭和15年竣工予定)と第2期事業(昭和15年以降実施)に分かれており、事業全体の予算は212万円の予定でした。もっともそのうち国費による予算は12万円ほどで、滋賀県や大津市などが80万円ほどを供進金として計上していますが、残りの100万円余りは、県内外の一般の篤志家たちによる募金によって賄われています。昭和13年(1938)、造営工事の本格着工を待たずに小林は亡くなりますが、大洞技師が角南の推薦を受けて近江神宮の工事に本格的に関わったのがこの頃のことと思われます。同年には県内の師範学校や旧制中学校の学生たちによる勤勞奉仕が本格的に始まり、6月に地鎮祭が執行、翌年には本殿の上棟式が行われました。そして昭和15年には続々と建物が竣工、11月7日には御鎮座祭が斎行され



ました。以降も工事は続き、昭和19年（1944）の11月5日に第2期事業の大半が完了し竣工式が行われました。

ここまでが近江神宮創建のあらましです。官民を巻き込んだ一大事業でしたが、それゆえに創建までの道のりは平坦なものではありませんでした。また造営工事が始まって、スムーズに工事が進展したわけではないことが大洞技師の残した日誌からわかります。例えば昭和13年9月の日誌には、工事の入札において、3度にわたって入札が行われたにも関わらずいずれも予算を超過しており、やむなく最低金額を提示した業者と交渉したもののなお契約に至らなかったことが述べられています。この記事以外にも一貫して予算不足には悩まされていたらしく、また戦局の悪化に伴う資材不足もそれに拍車をかけたと思われます。そのような困難な環境で数年にわたる大工事を完遂したのは、大洞技師の並々ならぬ努力と手腕があつてのことでしょう。

図面本体に目を向けると、薄手の和紙に主に鉛筆を用いて製図されています。極めて整然と引かれた図面は、単独でも鑑賞に耐えうる美しいものといえるでしょう。



【写真1】図面（近江神宮本殿平面図）

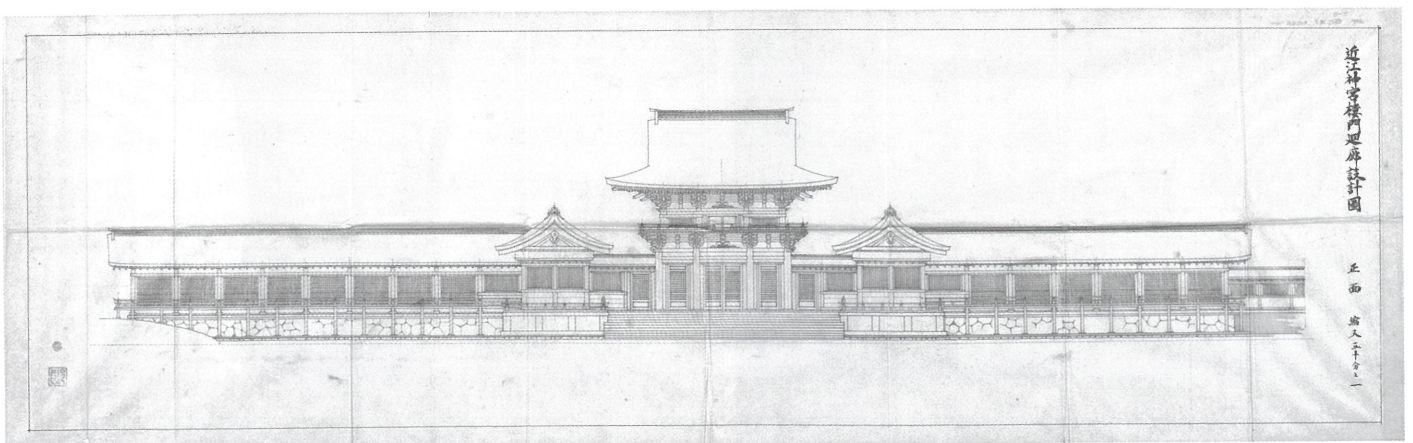
【写真1】の図面は、どの部分かを示す記載がありませんが、その形状から本殿および本殿に接続する祝詞舎、翼廊および中門から内拝殿までの平面図であることがわかります。近江神宮の本殿は流造で、この形式は明治神宮を

始めとする近代以降に創建された神社で多数採用されたものですが、近江神宮の場合は流造の向拝の部分にさらに祝詞舎が設けられ、祝詞舎に接続する形で渡廊が伸びて中門と接続し、左右には翼廊が取り付きます。さらに中門から登廊が下に伸びて拝殿（内拝殿）と接続します。さらに下方にはもう一つの拝殿（外拝殿）が作られ、2つの拝殿は回廊で接続されます。このようにそれぞれの建物の連続性が意識された構造で、二重の拝殿を持つことが大きな特徴です。

なお、図面の内訳をみると、残っている図面には偏りがあることが認められます。特に社殿建築の中で最も主要かつ重要であるはずの本殿に関する図面はわずかしかなく、本殿に接続する祝詞舎や渡廊、内拝殿といった建物の図面もほとんどありません。先の図面も場所の記載がなく、また図面の一部が切り取られた痕跡があり、正式なものではなく構想段階のものかと思われます。何らかの理由で図面類が処分されてしまった可能性もありますが、当時の造営にかかわる公文書などをみると、本殿、祝詞舎、中門、内拝殿といった建築物は国費造営分となっており、近江神宮奉賛会ではなく内務省神社局の直営工事であったことが関係していると思われます。とはいえ、わずかではあっても本殿などの図面が残されていることに鑑みれば、大洞技師も設計に携わり、最終的な図面類の取りまとめと施工を内務省が行ったと考えるべきでしょうか。

ここまで紹介してきた本資料ですが、本年度9月6日から開催予定のミニ企画展「近江神宮造営史—建築技師大洞藤三郎の設計図面から—」においてその一部を展示予定です。多くの大津市民に親しまれている近江神宮が創建された頃に、思いを馳せてみてください。

（学芸員 赤津将之）



【参考写真】「近江神宮楼門廻廊設計図 正面（縮尺五十分之一）」



## 戦時中に製作された紙芝居

子どもたちを前に、様々な物語を語り聞かせる紙芝居。その起源は諸説ありますが、もともとは小さな舞台を街頭に据え、うちわ状の紙に人物を書いて動かしながらお話を演じる「立絵紙芝居」から始まったといわれています。みなさんが想像するような、場面ごとに絵を描いて語る「平絵紙芝居」は、昭和5年（1930）頃に登場しました。また、ドラマなどにてでてる、子どもたちが広場でお菓子を食べながら、紙芝居をみる情景は、立絵紙芝居の時代から行われていた街頭紙芝居という方法で、菓子の販売の売り上げを目的に上演する街頭での興行形態だといえます。

本館には50点以上の紙芝居が収蔵されており、そのほとんどが戦時中に作られたものです。これらは先ほど紹介した街頭紙芝居とは少し違った性格を持っています。

大きな違いは物語の内容です。本館にある戦時中の紙芝居は、昭和13年に設立された日本教育紙芝居協会や、その後に結成された大政翼賛会の推薦を受けた作品が多くを占めています。こうした紙芝居は、子どもたちを楽しませる娯楽的なお話ではなく、国策の宣伝や人々の戦意を高揚させる内容ばかりです。

例えば『チョコレートと兵隊』【写真1】という作品は、実話に基づいたもので、戦地に行った父親が他の兵隊たちからチョコレートに付いた商品と交換できる点数券を集め、家で待つ子どもたちに贈る話です。また『進め一億、“火の玉”父さん』【写真2】では、アメリカやイギリスに対する宣戦布告について、物語仕立てで説明しています。ほかにも金属供出を奨励する『金物総動員』【写真3】や、常会（町内会の集会）の重要性を説く



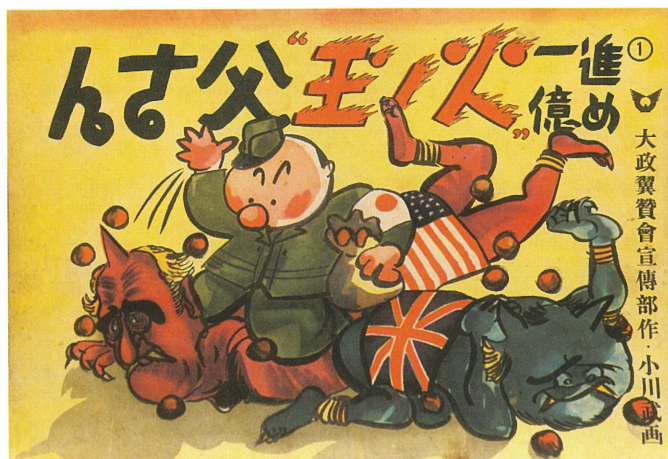
【写真1】『チョコレートと兵隊』（日本教育紙芝居協会作、昭和16年）

『常会の手引』（日本教育紙芝居協会作、昭和17年）など、子ども向けとは言いがたいものもあつたりします。

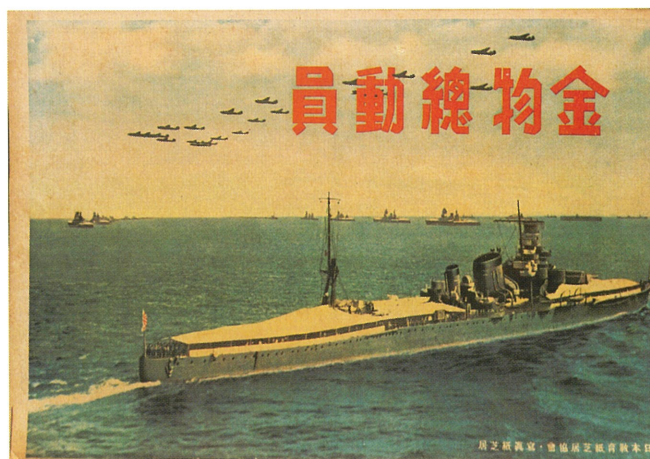
地方によって異なりますが、昭和13年の日本教育紙芝居協会の発足前後、紙芝居は事前に検閲を受けることや、説明書通りの演出が義務付けられるなど、自由な上演ができなくなりました。一方で、言葉や文字ではなく、視覚的に訴える紙芝居は、映画以上に全国津々浦々に伝えることができるメディアとして注目され、戦意高揚のために学校教育の場や大人向けに常会の場で、活用されるようになっていきました。こうした紙芝居は、決して子ども向けばかりではなかったということです。

本館では、この夏ミニ企画展「戦時中の紙芝居」（8月2日～9月4日）を開催し、あわせて天津市遺族連合会との共同で、ロビー展「戦地からの手紙」を開催します。戦時下の人々の生活の一端をぜひご覧ください。

（副館長 木津勝）



【写真2】『進め一億、“火の玉”父さん』（大政翼賛会宣伝部発行、昭和17年）



【写真3】『金物総動員』（日本教育紙芝居協会作、昭和16年）